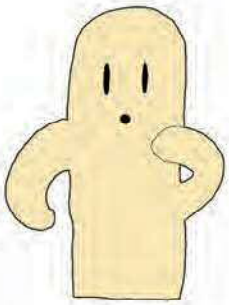

猪方小川塚古墳公園ができあがるの楽しみだね！
でも、猪方小川塚古墳が軟らかい石でできてるって池上先生が言ってたぞ！そんな壊れやすそうなもの（ボクもだけど）をどうやって保存するんだろ？教えて、松井先生！

貴重なものを伝えていくことに、ちょっとくらいは貢献できているのかなって感じですけどね。科学の方がね。（松井）

—現地保存するにあたってどのようなことに留意されましたか？—

猪方小川塚古墳の要は石室になりますが、敷地全体が古墳の一部であり、史跡となっています。見つかった時点で、すでに古墳の墳丘部分はかなり失われていましたが、それを出来るだけ見た目の違和感がないように整備しました。それを修景というのですが、パっとみて古墳だと分からないとおかしいので。

ちなみに、北海道・北東北の縄文遺跡群やナスカの地上絵の保存でも、同じ技術を使っています。

—石質が軟らかく保存に苦労したと聞きましたが、どのように石の補強をしたのですか？—

石に薬剤をスプレーやハケで塗ってしみ込ませ、強くしています。薬剤は液体ですが、固まるとガラスになるものを選んでます。ガラスは土や石の成分と一緒で、固まったら石になる成分の薬剤を入れているわけです。液体が入るということは、石に隙間ができていて、そこに入るということです。つまり、失われた部分に入るわけで、補っているんです。そして、隙間が補われると石が全体として密になるから強くなります。このようなイメージになります。

ちなみにこの技術は、カンボジアのアンコール遺跡群の浮き彫りの保存にも使っています。あと、イースター島のモアイの保存にも使われていますよ。

—歴史公園に期待することは？—

猪方小川塚古墳については、埋め戻しという選択肢もあったと思います。けれど埋め戻しをすると、地域の人たちが本物を見られなくなってしまいます。例えば、博物館などの展示で、レプリカって書いてあったら、「なんだレプリカかぁ…」って思いますよね。やはり本物をちゃんと見せるのは、すごく大事なことだと思います。本物には、それを伝えてきた人の営みや想いが蓄積されています。文化財の価値には、大きいとか一つしかないとか、そういうものもありますけど、活用する中で文化財を伝えてきた人の想いもつなげていければと思っています。また、地域の中で、みんながリスペクトしながら共有している。自分たちのものであるという想いをどういう風につなげていくか、こんなところを体現できたらいいのかなと思います。

そして、地域の中に取り込まれていって、みんなが集まるような場所になればいいと思います。例えば、史跡に桜は多いけど、みんな史跡を見に行くわけではなく桜を見に行きますよね。でも、結果として史跡に人が集まっていますよね。これって、史跡と社会の関わりあい方の一つで、きっかけは桜だったとしても、ふとした時や何年か後にいろんな知識が身に付いた時に、「あっ！ここはこういう場所だったんだ」と思えばいいし。費用対効果はすぐに出ませんが、こうした史跡と関わりあえる場所を地域に残していければいいかなと思います。

私たちは文化財というと、日光東照宮やピカソの絵などの美術品、「美」の価値に目が行きがちです。でも自分がどこに立脚していて、どういう土地に今いるのかという、ルーツを探ろうと思ったときには、ただ美しいだけでない文化財、歴史が積み重なって時間軸を持った文化財が必要になってきますから。

針を石にさして強度を確認しています

石材に薬剤を噴射しています

開園に向けて準備中
お楽しみに！

松井（まつい） 敏也（としや） 先生
筑波大学教授
専門は文化財保存科学
アンコール遺跡群などの世界遺産を含め、石造文化財の保存で活躍している